

金時鐘『背中の地図』(二〇一八)と三・一一東日本大震災

——濟州四・三と帰国事業の観点から——

岡崎 享子

はじめに

在日朝鮮人^①一世の金時鐘(一九二九)は、日本において日本語で文学活動を行う詩人である。彼は植民地朝鮮の釜山で生まれ、幼少期から一九四九年の渡日に至るまで主に濟州島で過ごした。植民地解放後、一九四八年四月三日に濟州四・三事件(以下、濟州四・三)が勃発すると、金時鐘は、南朝鮮労働党(以下、南労党)の連絡係として活動したことが原因で追われる身となり、一九四九年六月に日本へ渡った。渡日後、在日朝鮮人の組織活動を行いながら、日本語による文学活動を始め、一九五五年に第一詩集『地平線』^②を発表して以降、今までに九つの創作詩集を刊行している^③。また、自身のライフヒストリーをはじめ、在日朝鮮人の立場から朝鮮半島情勢や日本の社会問題等について論じた作品を発表するなど、現在に至るまで旺盛な創作活動を続けている^④。

金時鐘に関する研究は、現在に至るまで数多くなされている。研究テーマに関しても、使用言語の問題について論じたもの、金時鐘の作品を彼のライフヒストリーから論じたもの、韓国近代文学の翻訳を論じたものなど多岐にわたっている。その中でも、ディアスポラ文学の枠組みから論じた細見和之による研究^⑤、金時鐘の詩作方法を「短歌的抒情の否定」という観点から論じた呉世宗による研究^⑥、金時鐘の作品

に詳細な注釈をつけながら論じた浅見洋子による研究^⑦などが、重要な研究成果としてあげられる。これらの先行研究では、いずれも一九七〇年に発刊された『新潟』^⑧を金時鐘の主要な作品の一つと認め、その重要性について指摘している。例えば呉世宗は、共和国への帰国事業をテーマに編まれた『新潟』には、金時鐘の言語使用の問題や在日朝鮮人としての在り方に関する方向性が示されていると論じ、詳しい作品分析を行っている^⑨。

これらの金時鐘に関する重要な研究は、二〇〇〇年以降に登場した。二〇〇〇年になると金時鐘研究は大きな転換期を迎えた。この年を機に、金時鐘が自身の濟州四・三の体験を公に証言するようになったからである。これにより、濟州四・三が金時鐘の人生における重要な出来事であっただけでなく、彼の創作活動の「原点」であり「源泉」であることが理解されるようになった。また、二〇〇〇年以降に金時鐘本人が語った濟州四・三に関する証言を通じて、金時鐘作品を濟州四・三の体験と結びつけながら読み解くことが可能になった。これに関して呉世宗は、二〇〇〇年以降の濟州四・三の証言と『新潟』で描かれた濟州四・三の言葉は一致しており、詩が記憶として働いていると指摘している^⑩。また細見も、『新潟』について、金時鐘が経験した濟州四・三、朝鮮戦争、帰国事業等の歴史的出来事が組み込まれていると述べている^⑪。このような見解からもわかるように、金時鐘の

人生において、濟州四・三の体験は帰国事業の体験と密接に結びつき、この二つの体験は金時鐘作品の中で繰り返し登場するテーマとなっている。

以上のような問題意識のもとに、本稿では、二〇一八年に発刊された金時鐘の第八詩集『背中の地図』¹⁴について考察を行う。今まで行われてきた金時鐘研究は、主に二〇〇〇年以前に発刊された詩集を対象としており、二〇〇〇年以降に発表された第七詩集『失くした季節』¹⁵や『背中の地図』については未だ十分な研究が行われていない。また、二〇〇〇年以前の作品には金時鐘自身が深く関わった在日朝鮮人の歴史が主に扱われているのに対して、二〇〇〇年以降に発表された金時鐘の作品には、日本における社会問題が今まで以上に鋭く描かれていることが大きな特徴となっている。その中でも、特に『背中の地図』は、二〇一一年三月一日に起こった東日本大震災（以下、三・一一）をテーマに編まれた詩集である。『背中の地図』の「あとがき」によると、金時鐘は三・一一が起こったことにより、「日本のこれまでの詩の在りようをも、破綻させずにはおかなかった」、「詩の書かれるいわれが根底からひっくり返ってしまった」と述べている（二三六―一三七頁）。このように、三・一一は詩人としての金時鐘の創作活動に大きな影響を与えた出来事であった。

しかしながら、『背中の地図』は、ただ三・一一から受けた衝撃について書かれた詩集ではない。これに関して、金時鐘は、三・一一を体験した者として、「どうすれば「記憶に沁み入る言葉」が紡ぎだせるのか」（「渇く」に寄せて）三二頁）と問いながら作品を書いたと述べている。ここで金時鐘が「記憶に沁み入る言葉」と語る際の「記憶」とは、いったい何であろうか。三・一一は金時鐘に大きな衝撃を与えたが、その衝撃は、彼の無意識の中に沈潜していたトラウマとも

いえるような体験の「記憶」を呼び起こすものであった。その一つは、濟州四・三の「記憶」であり、もう一つが一九五〇年末から始まった帰国事業の「記憶」であった。このように『背中の地図』は、三・一一の体験を通じて、在日朝鮮人として生きてきた自分の人生をもう一度振り返るために編まれた詩集であり、その中心となるテーマは二〇〇〇年以前に刊行された詩集においてと同様に、濟州四・三と帰国事業であったのである。

以上のような観点から、本稿では、『背中の地図』の中から濟州四・三と帰国事業をモチーフとする詩を選び出し、特に濟州四・三をテーマに編まれた『失くした季節』と帰国事業をテーマに編まれた『新渇』といった先行詩集との比較を通じて、金時鐘の個人的な「記憶」が三・一一の体験とどのように交差しながら描かれているのか明らかにする。

第一章、『背中の地図』の概要

二〇一八年に発表された『背中の地図』は第一章「山濤やまなみのあと」、第二章「日は打ち過ぎて」、第三章「禍いの青い火は燃える」の全三章からなる。各章ごとに九篇の詩が収められており、全部で二七篇の詩が収録されている。これらの詩は、二〇一一年から二〇一八年にかけて発表されたものであり、本詩集のために書き下ろされた作品、初出を別を持つ作品、または初出を一部修正・改作した作品がある。

詩集の冒頭には「序詞」（六頁）が置かれており、詩集のタイトルである「背中の地図」に込められた意図が述べられている。以下は「序詞」の全文である。

ノアの洪水を思わせた東日本大震災の地、東北・三陸海岸は、日本列島を形づくっている本州の背中に当たるところのように私には思える。振り返っても自分では見えない、運命の符丁が貼り付いているかのような背面だ（六頁）。

ここに記されているとおり、「背中」とは、日本列島の裏側という意味で、三・一一で大きな被害を受けた「東北・三陸海岸」を比喻する言葉として用いられている。

その一方で、「背中」は人間の身体部位、とりわけ金時鐘本人の手が届かず目に見えない場所としても用いられている。これに関しては、三・一一が起こった当時、金時鐘が実際に体験した実話にもとづく作品「背後は振り返れない」（七〇～七五頁）で次のように描かれている。

むずかゆいとか／刺されて痛かゆいとか／どのようになじで肘を曲げて角を立てても／右が駄目なら左の指先とんがらせて／這わせてみても／年寄りの骨格ではどうにもならない一点が／背中にはあつて／三面鏡を背に映したところで／振り向けばなおその一点はねじった方向の／側面に隠れて眼からますます遠く／なってしまう（七〇～七二頁）。

この後に「ばつ悪くも私はそのとき新幹線のトイレの中にいた」と続くが、これは金時鐘の実話に基づく。『背中地図』の「渴く」によせてには、三・一一が起こった当時、金時鐘が高見順賞の授賞式のため東京に行く途中の新幹線の中にいたことが記されている。「背後は振り返れない」に書かれているように、「私」が新幹線のトイレ

の中で、「年寄りの骨格ではどうにもならない」「背中」の「一点」に手を伸ばそうとしているところに、三・一一が起こった。地震が起こった直後、「私」は「どうにもならない何か／日本で一番手の届かないところで突発」したことを感じ取り、「自分の背中に亀裂が走るのを覚え」る。その後、状況を把握した後に、もう一度「自分の背中をまぐつて」みても、やはり「一点」には届くことはなく、何が取り付いているのかを確認できない、という内容で作品は終わる。

このように金時鐘は、「背中」という言葉に、日本の裏側である三・一一の被災地と、自分の手が届くことのない見えない場所という二重の意味を持たせている。このことは、同作品における、「事はいつも自分のいないところで起き／自分では見定めようもないところで／異変は突発する」という箇所からも読みとれる。

それでは、『背中地図』の「地図」にはどのような意味があるのか。同じく「背後は振り返れない」には、三・一一の被災地である東日本の地理的位置付けについて次のように書かれている。

「ウラ日本^{ニホン}」とはたしか／脊梁山脈を北へ超えた／日本海寄りの地方のはずだ。／大津波はまさにその裏のうらを衝いて／弓なり状の本州の背を襲ったのだ（七二～七三頁）。

ここに記されているように、金時鐘は日本列島を縦断する脊梁山脈を境に日本海側の「ウラ日本^{ニホン}」と太平洋側のオモテ日本があると認識している。『新潟』（一九七〇）にも「脊梁山脈の彼方に／日本の表裏を割す大地裂帯があることは／案外知られてない確証の一つだ」（一頁）と書かれている。金時鐘は朝鮮半島で満二〇歳まで過ごし、渡日後も彼の眼差しは、「ウラ日本^{ニホン}」側から朝鮮半島に向いていた。さら

に、『新潟』で描かれた帰国事業も「ウラ日本^{ニホン}」側の出来事であった。このように、金時鐘は、彼の経験にもとづいて作られた「地図」を持つていたのだ。したがって、金時鐘は、三・一一を自身の「地図」の上にはない範囲、あるいは見ようとしてこなかった「死角」、すなわち「背中」（背後は振り返れない）七四頁）で起きた出来事と捉えた。金時鐘は、「東北は結局のところ列島の背すじあたりで呻いて／そこは振り向いても見えはしない／昏い背中だ。／忘れ果ててしまった何かが／打謎^{だめい}の符丁のように貼り付いている」（「夜汽車を待つて」六四頁）と、自省しながら繰り返し述べる。金時鐘は、三・一一と向き合う中で、「忘れ果ててしまった何か」があることに気付き、それが何であるのかを探ろうとする。その過程の中で、彼は、「ウラ日本^{ニホン}」で自身が体験した個人的な記憶を思い起こしたはずなのである。

第二章、『背中』の地図』と濟州四・三

(一) 『失した季節』に描かれた濟州四・三

金時鐘は、一九九八年に渡日後初めて濟州島を訪問し、その二年後の二〇〇〇年に濟州四・三の体験を公の場で語った。韓国では二〇〇〇年に「四・三特別法」が公布され、二〇〇三年には盧武鉉前大統領が韓国政府を代表して濟州四・三の犠牲者遺族に謝罪を行うなど、濟州四・三に関する真相究明が進み犠牲者の名誉を回復しようという動きが出てきた。このような韓国における濟州四・三を取りまく動きに比べると、金時鐘は濟州四・三の体験について徐々に語り始めるようになった。特に自らのライフヒストリーを詳細に綴ったエッセイ集『朝鮮と日本に生きる』¹⁶において、濟州四・三の体験を詳細に述べ

ている。それだけではなく、創作詩集の中にも濟州四・三の体験をより直接的、具体的に描くようになった。とりわけ二〇一〇年に発刊された『失くした季節』には、濟州四・三の体験が数多く描写され、詩集全体を貫く重要なモチーフとなっている。

『失くした季節』には、四季をテーマにした詩が収められており、「夏」、「秋」、「冬」、「春」と名付けられた各章から構成されている。ここで注目すべきなのは、四季の始まりが「春」からではなく、「夏」から始められている点である。このような金時鐘の季節観は彼の人生体験と密接に関わっている。金時鐘にとって、植民地解放を迎えた「夏」が季節の始まりであり、濟州四・三を体験した「春」が季節の終わりを意味しているのである。これに関しては、『失くした季節』の中に収められた「四月よ、遠い日よ。」（一六二―一六七頁）の注釈において、「筆者に「四月」は四・三事件の残酷な月であり、「八月」はぎらつく解放（終戦）の白昼夢の月である」と説明されている。

また同作品は、「ぼくの春はいつも赤く／花はその中で染まって咲く」から始まり、続いて「春」に起こった濟州四・三の体験が描写されている。例えば、「四月は夜明けの烽火^{のろし}となって噴き上がった」という描写は、濟州四・三が始まる武装蜂起の合図をあらわしている。その他にも、「村が燃え」、「軍警トラックの土煙りが舞って」いるなど、濟州四・三が起こった当時の様子が描かれている。冒頭で描かれた「春」が「赤い」という描写からは、「ぼく」が濟州四・三で目撃した武装蜂起の「烽火」や村を燃やす「火」、さらには血や殺戮のイメージを連想できる。そして、作品の後半では、「日本で」^{かたよ}「偏^{かたよ}って生き」ながらも四月になると濟州四・三の記憶が蘇るといふ「ぼく」の心情が述べられている。このように金時鐘にとっての「春」とは、濟州四・三の季節を意味した。

この他にも、『失くした季節』には、春をテーマとした作品が見受けられる。例えば、「春に來なくなつたものたち」（一六八～一七三頁）において、「春」は「蘇える季節に／來るものがこない」、「咲くものが咲かない」、「何が」「絶え」る季節として描かれている。このように金時鐘にとつての「春」は、あらゆる存在に命を芽吹かせる季節の始まりではなく、むしろ多数の同胞たちに残酷な死をもたらした季節の終わりを意味するものであった。

三・一一の後に編まれた『背中の地図』においても、このような金時鐘の独特な季節観を見ることができるといえる。東日本大震災が起こつた三月一日は、「冬」が終わりを告げて、まさに「春」を迎えようとする季節であった。『背中の地図』においても「春」をテーマとする作品が数編収められているが、そこには濟州四・三の「春」のイメージが重ね合わされている。以下では、『背中の地図』の中から「春」をテーマとした詩を選んで、濟州四・三の記憶と三・一一の体験がどのように結びつけられているのか考察してみたい。

(二) 『背中の地図』に描かれた濟州四・三

① 「また そして 春」の分析

『背中の地図』の第二章「日は打ち過ぎて」には、「また そして 春」（五六～五九頁）が収められている。この作品には特定の地名が記されていないが、「災禍」や「仮住まい」という言葉から、震災後の冬の被災地を描写したものと考えられる。作品の前半では、「人気のない通り」、立ちつくしたままの「小学校」、校庭にこもつた「声」、「閉ざしたままの家の門」などが描かれ、「すべてが墨の絵のように淡く」、「自然を象^{かたど}つたはずんでいる」だけであることが記されている。このように、この詩では、震災の後に生き残つた者が、三・一

一によつて取り残されたものを確認するという内容となっている。

三・一一の被災地に取り残されたものを描写した詩は、『背中の地図』の中に数多く登場する。例えば、「風のなか」（二〇一～二〇五頁）では、「その日」のままに立っている「家」、スーパー、うどん屋、野球少年の「白い影」などといったものが出てくる。また、「エレジーの周り」（五一～五五頁）では、取り残されたものとして、犠牲になつた人々の「声」が描かれている⁽¹⁾。このように、残された者が、失われたものと取り残されたものを確認するというテーマは、『失くした季節』に収められた濟州四・三と関連する詩にも共通するものである。

「また そして 春」においても、作中の登場人物である「私」が取り残された存在として描かれている。そして「私」は被災地を目にしながらも、「車窓を透かして浮かんでいる自分の顔を／見つめるともなく覗いているに違いない。／春だ、なんてつぶやきながら」という場面で作品は終わる。この場面は、「私」が被災地を訪れ、現地の様子を確認した後、電車に乗って帰路につくまでの間に「車窓」に映る自分自身を覗いている状況を表している。

それでは、「私」が「車窓」に反射している自分を見る、とはいつたい何を意味しているのだろうか。ここでは、作中の「私」が被災地で残されたものを確認する中で、雪の下で震える「記憶」の存在に思いを馳せる場面に着目する。三・一一の被災地で「私」は過去の「記憶」を発見したのである。つまり、帰路につく「私」が「車窓」で自分を覗くことは、「私」の記憶を見る行為である。さらに、私を金時鐘と考えた場合、この描写は金時鐘が三・一一の被災地に直面することによつて自らと向き合い、過去の「記憶」と出会い直す行為をあらわしているといえる。

このことは、次に続く「私」の「春だ」というつぶやきでより明確

になる。ここで「私」は、冬の被災地を見ながらも、なぜ「春だ」とつぶやいたのだろうか。『失くした季節』でも確認したように、金時鐘にとつての四季は「夏」から始まり「春」で終わるものであった。特に金時鐘にとつての「春」は、多数の同胞が無惨にも散っていった「死」の季節として、四季の最後の季節を意味した。このように考えると、この詩の中で「私」が「春だ」とつぶやいたのは、雪に覆われた「冬」の被災地を通じて済州四・三の「春」を思い出していることがわかる。「冬」の被災地と、済州四・三の「春」を交差させることで「死」を象徴させているのである。

② 「弔い遙か」の分析

『背中地図』では、死者に関する描写が克明になされている点が大きな特徴となっている。その代表的な作品として、ここでは第一章「山濤のあと」に収められている「弔い遙か」(二二～二五頁)を取りあげたい。この作品では、「生身はからみ合った流木の／澱みの底でずり落ちていた。／判別がつかぬほど／人間を脱した亡骸だった」というように、死者の描写から始まる。その後にも、死んで「瞳孔がない」「バスの運転手」が描かれている。この他の作品にも、「憩わせていた船まで押し上げて／山濤はあまたの生涯を沖へ沈めた」、「海の底で泥まみれの磧の下で／土砂につかえた動けぬ命が噎せている。／息せききった村人たちの懸命な手を待ちながら／拉げて固くなっていつている」(「禍は青く燃える」一六～一七頁)等の死者の描写が見受けられる。「山濤」は、『背中地図』の第一章の題目「山濤のあと」にも使われている言葉であるが、「神々の深い溜息に渚がたわみ／迫り上がった海が山濤となって／いつとときに列島の背を打ったのです」(「夜の深さを 共に」一三二頁)と記されているように、津波をあ

らわす比喩表現である。このように、『背中地図』には、津波や災害で亡くなった死者を連想させる描写が数多く登場する。

いったいなぜ、金時鐘はこのように津波による無残な死者の姿を詳細に描いたのか、あるいは描くことができたのか。それはやはり、済州四・三の体験がその背景にあると考えられる。金時鐘は二〇〇年に開催された「済州島四・三事件五二周年記念講演会」において自身の済州四・三の体験を始めて公の場で語った。講演の内容は、「記憶せよ、和合せよ」(二〇〇〇年)¹⁸⁾に掲載されている。そこで金時鐘は、済州四・三の最中に「豆腐のおから」のような状態の死体を実際に目撃したと述べている。以下は、その状況について証言した内容である。

ゲリラ側に仕立てられた民衆を針金で括って五、六人単位で海に投げ込んで虐殺をした、その死体が数日たつと浜に打ち上げられてくる。私の育った済州島の城内の浜は砂利浜ですが、海が荒れると砂利がグオーっと鳴って響くんです。そこに針金で手首を括られた水死体が打ち上げられてくる。何体も何体も。海に浸かっていたために、その体は豆腐のおからのようになっていて、波が寄せるたびに向きを変え、皮膚がずるとずり落ちるんです。明け方から遺族たちが三々五々集まってきて、死体を確認する¹⁹⁾。

この証言の中で語られている「ゲリラ側に仕立てられた民衆を針金で括って五、六人単位で海に投げ込んで虐殺」とは、済州四・三の中で頻繁に行われた水葬を意味する。水葬とは本来、死体を海に葬流することであるが、ここでは生きたまま海に投げ入れて虐殺することを

指す。文京洙によると、一九四八年の一〇月以降、多くの島民が「赤色分子」、「左翼（南労党）フラクション」として処刑され、虐殺の痕跡を消すために済州沖に投げ捨てられたとされる。²⁰これに関して、金時鐘は、二〇一九年九月二十九日に行われた「第三回対馬・済州慰霊祭」に参加し、そこで行われたインタビュで水葬の死体を目撃したことを次のように振り返っている。

事件の当時、水葬が始まったのは四八年十月末頃から。当時アールコール工場があった場所で、今は無くなったと思いますが、米軍の小さな船に手を縛られた人々を乗せて連れて行ったのを二度見ました。…中略…タプトンで水葬された死体が上がってきたのも二度ありました。水に入れられて長い時間経ったため、…中略…水の流れに押したり引いたりされて、骨になります。肉が剥がれて。記録には、五〇〇数体が水葬され虐殺されたところなのですが、実際に肉体が上がってきたのは、そんなにありませんでした。ですので、その頃済州の海流から流れ、対馬のなにわ海流に合流して対馬に漂着したのでしょう。²¹

このように金時鐘は、済州四・三当時、水葬のために連行される人々を二度目撃し、水葬された死体がタプトンという海岸に打ち上げられた姿を目撃したと証言している。それも、まるで昨日のことであつたかのように、死体の様子を克明に説明しているのが印象的である。そして、金時鐘が目撃した済州四・三の犠牲者たちの「死体」は、時を経て二〇一八年に発表された『背中の地図』の中で、三・一一の犠牲者たちの描写の中に再び立ち現われたのである。このように、『背中の地図』に描かれた死者たちの詳細な描写は、済州四・三にお

ける金時鐘の原体験が下地となっている。また、三・一一の犠牲者と済州四・三の犠牲者に共通するのは、「水」による死者が多数発生したという点である。津波による三・一一の悲惨な被害を目の当たりにした金時鐘は、「水による死」というイメージを媒介として、無意識の中にトラウマとして沈潜していた済州四・三の水葬の記憶を再び体験したのではないかと考えられる。

第三章、『背中の地図』と帰国事業

(一) 長編詩集『新潟』に描かれた帰国事業

金時鐘は、一九七〇年に帰国事業をテーマとした長編詩集『新潟』を発表した。浅見洋子によると、この詩集は一九六〇年前後に完成し、一九六三年頃には出版できる状態にあつたという。²²つまり、帰国事業が始まって間もない時点で、金時鐘は『新潟』を書き終えていた。しかし、組織との対立等により、金時鐘は約一〇年間文学活動を行うことさえ困難な状況に陥り、『新潟』の発刊は、金時鐘が組織と決別した後の一九七〇年まで待たなければならなかつた。このことから分かるように、『新潟』は、彼が在日朝鮮人組織との関わりを断ち、一人の在日朝鮮人詩人として再出発する決意が込められたという点において重要な作品であつた。

『新潟』は、在日朝鮮人である「ぼく」が朝鮮人集落猪飼野から帰国船が出港する新潟港へ行くものの、帰国船には乗らずに朝鮮半島の分断線を超えようと試みる物語である。『新潟』の最後は、共和国でも日本でもない海の上で「一人の男」（一九五頁）が歩いているという結末で締め括られている。金時鐘は、『新潟』を書いた目的について、日本の中で分断線を越える物語を描くことであつたと述べている。²³実

際、一九四九年に濟州島から渡日した金時鐘は、当初日本を経由して共和国に行くつもりだったと言う程、共和国にシンパシーを感じていた²⁵。しかし、朝鮮戦争の休戦後、共和国において金日成体制が確固たるものとなっていく過程で、自身が所属していた南労党のリーダーである朴憲永（一九〇〇～一九五六）や林和（一九〇八～一九五三）が肅清されるといふ知らせを受け、共和国に疑念を持つようになったとい²⁶う。これに関しては、先に述べたように、金時鐘が一九五〇年代に所属していた組織との対立を深めていったことも、共和国に疑念を持つに至った要因の一つであったと考えられる。

このような背景もあり、帰国事業において、金時鐘は日本に残り、帰国船に乗って共和国へ向かう周囲の在日朝鮮人の人々を見送る側に立った。つまり、『新潟』における「一人の男」とは、金時鐘の等身大の姿を描いたものであった。そして、帰国事業で帰国船に乗らなかった「一人の男」は、五〇年以上もの歳月が経った後に、『背中の地図』の作品「窓」の「私」として再び描かれることになるのである。

（二）『背中の地図』に描かれた帰国事業：「窓」の分析

『背中の地図』の第三章「禍いの青い火は燃える」には、「窓」（二二～二四頁）が収められている。この詩は、「窓」一枚で仕切られる「内」と「外」の二つの世界を描いたものであるが、そこには金時鐘の帰国事業の体験が三・一一の体験と交差されるように描かれている。

「窓」は、三・一一が起こる直前の『現代史手帖』二〇一一年一月号²⁷に掲載され、その一部を改編したものが『背中の地図』に掲載されている。この二つの版を比較すると、一部の言葉の変更や、大幅な追

記箇所があることがわかる。このような変更や追記は、三・一一の後に行われたものである。したがって、この二つの版の違いを比較・考察することによって、金時鐘が三・一一を体験した前後でどのような心境の変化があったのか読みとることができるといえる。

まず、『現代詩手帖』に掲載された初版本も三・一一の後に出版された『背中の地図』版も、冒頭の部分はまったく同じ内容であり、変更された箇所はない。その部分を引用すると、以下の通りである。

窓はもうひとつの／壁にはかならなかつた。／いくら見渡しても／さえぎられるばかりの境界だつた。／高さばかりが高まつていつて／外界はひたすら／透かされるガラスの無音の世界だ。／街なかの喧騒や／けたたましい異変のおのきよりも／窓はむしろ敗北をかかえる／晦渋な空間でいたいのだ。

このように、「窓」は「壁」であり、「境界」であることが示されている。そして、その後で「窓」の外側に関する抽象的な描写がなされている。すなわち、「外界」は「ガラス」のように透けて見えるにもかかわらず、「無音の世界」である。一方、それと対照となる内側については、「街なかの喧騒」や「けたたましい異変のおのき」が渦巻く世界と描写されている。このような表現から、「境界」とは南北を分断する三八度線を意味し、外界（外側）とは共和国、それに対する内側とは金時鐘の立つ場所のことを表していると考えられる。そして、この南北を分断する「窓」は、「敗北をかかえる」「晦渋な空間」として、その「壁」の高さは高まるばかりであると描写されている。このように、この詩は、民族分断の壁を「窓」に譬えながら、金時鐘本人である「私」との関係を描いたものである。

この次の箇所からは、「私」と「窓」の関係がより詳しく描かれている。しかし、その内容は初出版と『背中の地図』版で大きく異なっている。ここで、二〇一一年の『現代詩手帖』に掲載された初出版を（ア）とし、二〇一八年の『背中の地図』版を（イ）として、両版の変更点を比較すると「表一」の通りとなる（変更箇所を下線部で示し、両版の対応関係を示すために必要に応じて行間を加えた）。

表一…作品「窓」の『現代詩手帖』初出版と『背中の地図』版の比較

まず注目したいのは、（ア）において「私はいつ窓への不信を明かせるだろう」と記されている部分が、（イ）において「私の窓はいつ自らの意志の表れとなるのだろう」と変更されている点である。これに関して、（ア）において、なぜ「窓」は金時鐘にとって「不信」の対象とされていたのだろうか。ここで「窓」が南北朝鮮を分断する「境界」であると考えると、金時鐘にとつての「境界」とは、「自らの意志」によって作り出されたものではなかった。植民地朝鮮に生まれ育ち、渡日してから現在に至るまで、朝鮮半島と日本の政治情勢に翻弄され続けてきた金時鐘にとつて、「境界」とは常に時代状況により作られるものであり、他者から強いられるものであった。その意味で、「境界」は金時鐘にとつて「不信」の対象であった。

しかしながら、この「窓」は（イ）において、いつかは「自らの意志の表れ」となるものと書き直されている。つまり、南北分断の「境界」は、「自らの意志」によっていつかは克服される可能性を秘めたものとして捉え直されているのである。このように（ア）と（イ）の間には、大きな心境の変化が読みとれる。

そして、次の部分では「窓」を取り巻くより具体的な描写が続く。

ここで注目すべきは、（イ）において、帰国事業の描写と推測できる内容が大幅に加筆されている点である。すなわち、（ア）では、「またとは逢えない人たち」がどこに行ったのかについては言及されておらず、「窓」が具体的に何を指すのか示されていない。しかし、（イ）では、「またとは逢えない人たち」が「北の特異な国」へ行ったという新たな内容が追加され、「北」に行った人々たちを「見送った」側にいる「私」の立場についても書かれている。このことから、「窓」とは新潟港から共和国へと出発する帰国船の窓をあらわしていることがわかる。そして、この「窓」は「歓喜の声」をあげるが、その後、未来が閉ざされ、「舞い散る木々」を「見やっっている」存在になってしまふことが描かれている。

これに関しては、『背中の地図』の第三章に収録されている別の作品「またしても年は去り」（九二～九五頁）においても、「窓ガラスの内にこもったまま」の「私」が、共和国に憧れて帰ろうとする「友人」を見送る描写がある。その後には、「祖国、その祖国のほすの北がまだ正義であったころ／＼にじつてでも行き着いていかねばと／＼泣いて憧れた友がいた」と書かれている。このことから、この「窓」は、共和国へ出発する「友人」とその人々を見送る「私」の間に存在する「境界」であると解釈できる。

それでは、この「境界」とは、金時鐘にとつてどのような存在なのであろうか。帰国事業に関しては、金時鐘も渡日当初は共和国に行くつもりであったと述べている。このように、彼もまた帰国船に乗った友人の側、すなわち「窓」の外側にいたかもしれない者であった。そのように考えると、「境界」を跨ぐ外側と内側は確固たるものではなく、ふいに乗り越えられてしまう存在であるかもしれないことを表している。このことと関連して、金時鐘は、二〇一九年五月二九日から

表一：作品「窓」の『現代詩手帖』初出版と『背中の地図』版の比較

<p>(ア) 二〇一二年『現代史手帖』初出版 (省略)</p> <p>この自足をかこっている囲いの中で 私はいつ窓への不信を明かせるだろう。 とりたてた意味とてなく 窓からは星がちらつき雲が流れて 日差しがまばゆく移ろうている。 そしてかくも物事の内側で萎えていつている。 そう、別れはいつも過去のことだ。 またとは逢えない人たちに 叫んだこともない窓は今はまだ。 いやむしろ身を乗りだして 歓呼の声を挙げていたのが その窓だ。 未来へはついに開くこともないまま 窓はただ舞い散る落ち葉を見やっている。 それでも窓は内らにこもるものを愛する。 透明にさえぎられているなかで 競り上がる窓から愛そうとしている。 窓は内からかかる門である。</p>	<p>(イ) 二〇一八年『背中の地図』版 (省略)</p> <p>この自足をかこっている囲いの中で 私の窓はいつ自らの意志の表れとなるのだろう。 とりたてた意味とてなく 窓からは星がちらつき雲が流れて 日差しがまばゆく移ろうている。 そしてかくも物事の内側で萎えていつている。 別れは常に 思い返せるほどのへだたりしかない過去である。 またとは逢えるはずもない北への特異な国へ 声を漕らして見送ったのは私である。 叫びひとつあげたこともない窓が 以前にもまして音を断って静まっている。 いやむしろ身を乗り出して 歓呼の声をあげていたのがその窓でもある。 未来へはついに開くこともないまま 窓はただ舞い散る木々を見やっている。 それでも窓は内らにこもるものを愛する。 透明にさえぎられているなかで 事の成り行きをただ競り上がる窓から眺めている。 東北も福島も もちろん見晴るかすはるかな向こうだ。 窓は内からかかる門である。</p>
--	---

三二日にかけて開催された『済州フォーラム』の講演会（「境界は内と外の代名詞」）の中で、「境界」の二つの定義について述べた。一つ目は、「国境とか土地とかの境界、またはあるものの占めている範囲と他との境目」であり、二つ目は、「人がこの世に生きてゆく上で置かれてある立場や、地位を指しているときの使われ方」で、「そこには当然各自が出会った境遇、または置かれている環境も含まれ」という内容であった。⁽²⁸⁾先に述べたように、(ア)において「不信」の対象であった「窓」は、(イ)において「自らの意志の表れ」によって乗り越えられる可能性を有したものと書き換えられている。ここには、「境界」を自らの境遇や置かれている立場として受け入れ、「自らの意志」によって主体的に乗り越えたいという金時鐘の願望を見てとることができる。

そして、最後の部分では、注目すべき変更が加えられている。(ア)は、三・一一以前に発表された初出版であるために、三・一一や東北についての記述はない。それに対して、(イ)では、「東北も福島も／もちろん見晴るかすはるかな向こうだ」というように、三・一一のことを指し示す明確な一文が付け加えられている。さらに、「窓は内からかかる門かぬきである」という締め括りの文章の直前に置かれることで、帰国事業の時と同様に、「窓」は「私」と三・一一を隔てる「境界」であり「壁」として存在している。これに関しては、『背中地図』のいくつかの作品において、「私」が三・一一の被災地を汽車で訪れる場面や（夜汽車を待って）、「私」が被災地にいながらも「車窓」の内側にいるという場面が登場する（「弔い遙か」「また そして春」）。つまり、この場合の「窓」は、被災地を走る列車の「車窓」を意味しており、この「車窓」の内側にいる「私」と外側にある被災地との間には、透明なガラスで遮られた「境界」が横たわっているのだ

ある。

このように「窓」は、共和国に向かう帰国船の「窓」と被災地を走る「車窓」の二重の意味を持っている。それぞれの「窓」は、「境界」をあらわし、「私」は、共和国へ出発する人々や、三・一一の被災地を「境界」の内側から眺める存在として描かれている。帰国事業と三・一一の出来事を「窓」を隔てたところから見られない「私」の立ち位置は、二つの出来事に対して傍観者でしかいられないという金時鐘の心境を表している。

そして、この詩の最後の一行である「窓は内からかかる門かぬきである」という表現は、「窓」、すなわち「境界」を作っているのは「内」にいる「私」自身であることを意味する。つまり、金時鐘の故郷であるはずの共和国や三・一一の被災地に「境界」を作っているのは自身であるという自己批判の眼差しを垣間見ることができる。そのことは、他の作品「夜汽車を待って」においても確認できる。「私」が、被災地を尋ねた先で、「それ」に当たる「いつものあの書きつけのノート」を探している場面である。

絆や励ましや／地縁血縁の懸命な誼よしみがまつていた。／癒えない災禍への／せめてもの私の持ち寄りだった。／それがどうしたわけか見あたらぬのだ。／やはりへだたりは／己れがかこっている距離のようである（六三―六四頁）。

ここでも、「私」と「癒えない災禍」を隔てる「壁」が存在することが示されている。そして、やはり「へだたり」は「己れ」が作り出しているものとして描かれているのだ。なぜ金時鐘は、共和国や三・一一の被災地との間に自ら「境界」を作ったということを繰り返し書

くのだから。それは、金時鐘が、帰国事業で旅立っていった同胞や三・一一の被害を受けた当事者そのものにはなることができず、その痛みを共に感じる事ができないことに対する自責の念を持っていたからだと考えられる。

しかしながら、「境界」を自ら作るということは、「窓」の内側にいる「私」の意志によって、壁としての「境界」を乗り越えることができる可能性をも示唆している。先に述べたように、金時鐘にとつては、「境界」とは自らの「意志」によって作られるものではなかった。しかし、(イ)において、「窓」は自らの「意志」によって乗り越えられる可能性のあるものと記されているように、金時鐘は三・一一の体験を経て、「境界」を作り出すのも、乗り越えるのも、実は自らの「意志」次第であるということを示そうとしたのではないだろうか。

おわりに

本稿では、三・一一をテーマとして編まれた金時鐘の詩集『背中』の『背中の地図』を、金時鐘自身の個人的な体験に照らし合わせながら読み解くことを試みた。本稿の考察を通じて、三・一一の体験が金時鐘の濟州四・三と帰国事業の体験やそれにもとづく記憶と混じり合いながら描写されていることを確認した。

金時鐘は、二〇一八年二月初めに心不全症で緊急入院した先で病床につきながら、「人生もこれで終わったのか」と思い、三・一一をテーマに書き溜めてきた作品を本詩集にまとめたという⁽²⁰⁾。彼にとつて、『背中の地図』は、それ程の思いが込められた詩集であった。『背中の地図』の最後に置かれている「夜の深さを 共に」には、「私は見ました」というフレーズが四度も繰り返され、「私」が三・一一を

「見た」目撃者であることが強調されている。ただし、「私は見ました」という言葉には、現在と過去の出来事を「見た」という二重の意味が込められている。金時鐘は、三・一一を体験し、その被害に接しながら、過去の濟州四・三や帰国事業の体験をそれに重ね合わせることで、その「記憶」を「見た」のである。

実際、『背中の地図』に収められた作品には、「私」が三・一一の被災地に向き、その悲惨な様子が詳細に描かれている。しかし、そのあまりにも具体的に克明な描写からは、ただ三・一一の被災地の様子だけではなく、金時鐘本人がかつて経験した悲惨な事件の記憶が投影されている。第二章で述べたように、三・一一の津波による犠牲者の描写からは、金時鐘が濟州四・三の最中に目撃した水葬の犠牲者を思い起こさせる。また、第三章で述べたように、三・一一の被災地を訪れる列車の「車窓」は帰国船の「窓」を彷彿とさせ、「私」と三・一一の被害者たちとの間に存在する「境界」は、「私」と共和国へと旅立っていった同胞たちとの間に存在する「境界」をあらためて想起させる。

その「境界」は、三・一一や帰国事業の当事者にはなれないという金時鐘の自責の念が込められている。その一方で、「境界」は、「内からかかる門」と^{かんぬき}比喩されているように、自らの意志で乗り越えられる可能性を有したものとして表現されている。金時鐘にとつて三・一一は、日本列島を襲った未曾有の大災害であっただけでなく、それまで彼自身が抱き続けてきた在日朝鮮人の歴史的痛みと向き合い直す契機となったのである。

注

(1) 本稿では、朝鮮半島にルーツを持ちながらも日本で生活している者を「在

日朝鮮人」と称し、「在日朝鮮人」によって書かれた文学を「在日朝鮮人文学」とする。また、解放後の一九四八年に成立した朝鮮民主主義人民共和国を「共和国」、大韓民国を「韓国」と略称する。

- (2) 『濟州四・三事件真相調査報告書』では、濟州四・三について「一九四七年三月一日を起点とし、一九四八年四月三日に発生した騒擾事態及び一九五四年九月二日まで濟州島で発生した武力衝突と鎮圧過程において住民が犠牲になった事件」と定義している(濟州四・三真相究明及び名誉回復委員会『濟州四・三事件真相調査報告書』日本語版、二〇一四年、五八四頁)。濟州四・三は、統一国家の建設、南だけの単独選挙反対等の目的を掲げた左派勢力である南朝鮮労働党が漢拏山の頂上に烽火したことを合図に武装蜂起が始まった。それに対し、軍警や右派勢力は激しい弾圧を加え、相互の対立過程において約二万五千人と三万人の島民(当時の島民の約一〇人に一人に当たる)が犠牲になったとされている(同書、三七六―三七七頁)。

- (3) 金時鐘『地平線』デンダレ発行所、一九五五年。

- (4) 金時鐘は生涯を通じて多数の作品を残しているが、金時鐘の創作詩集としては以下のものがある。『地平線』(デンダレ発行所、一九五五)、『日本風土記』(國文社、一九五七)、『新濁』(構造社、一九七〇)、『猪飼野詩集』(東京新聞出版局、一九七八)、『光州詩片』(福武書店、一九八三)、『化石の夏』(海風社、一九九八)、『失くした季節』(藤原書店、二〇一〇)、『背中の地図』(河出書房新社、二〇一八)、『日本風土記』(藤原書店、二〇二二)。

- (5) 金時鐘のライフヒストリーを語った重要なエッセイ集として、『さらされるものとさらすものと』(明治図書出版、一九七五)、『クレメンタインの歌』(文和書房、一九八〇)、『在日』のはざま(立風書房、一九八六)、『なぜ書きつづけてきたかなぜ沈黙してきたか』(平凡社、二〇〇一)、『わが生と詩』(岩波書店、二〇〇四)、『朝鮮と日本に生きる』(二〇一五)、『在日』を生きたる』(二〇一八)等がある。また、金時鐘の全集にあたる全二二巻の『金時鐘コレクション』(藤原書店)が二〇一八年から刊行されている最中である。

- (6) 細見和之「解説―強韌で繊細な知恵―金時鐘『在日』のはざま」によせて『在日』のはざま(平凡社、二〇〇一年)。

- (7) 呉世宗『リズムと抒情の詩―金時鐘『長篇詩集新濁』の詩的言語を中心に』藤原書店、二〇一〇年、二〇二頁。

- (8) 浅見洋子『金時鐘の言葉と思想―注釈的読解の試み』二〇一二年度大阪府

立大学大学院博士学位論文。

- (9) 金時鐘『新濁』構造社、一九七〇年。以下、本書からの引用は本文中に頁数のみを記す。

- (10) 一九五八年から一九五九年の間に集中的に展開された、共和国への帰国希望在日朝鮮人の集団的・組織的運動を指す。途中一時中断もあったが、一九八四年までに一八七回、約九万三三四〇人が北朝鮮に帰国した(『在日コリアン辞典』明石書店、二〇一二年、八八―八九頁)。

- (11) 呉世宗、前掲『リズムと抒情の詩』二〇二頁。

- (12) 同上、三三二頁。

- (13) 細見和之『ディアスポラを生きたる金時鐘』岩波書店、二〇一一年、八四―八五頁。

- (14) 金時鐘『背中の地図』河出書房新社、二〇一八年。以下、本書からの引用は本文中に頁数のみを記す。

- (15) 金時鐘『失くした季節』藤原書店、二〇一〇年。以下、本書からの引用は本文中に頁数のみを記す。

- (16) 金時鐘『朝鮮と日本に生きる』岩波書店、二〇一五年。

- (17) 『背中の地図』の中で残されたものとして、原子力発電所に関わる言葉が頻出する。例えば、「年被曝限度」(不在 一三三頁)、「除染」(網 一六頁)、「原子力発電所」(道の理由 二〇頁)、「馴染んで吹かれて」(八二頁)、「天外の青い火」(「引い遙か」二二頁)、「青白い天外の火」(「エレジーの周り」五四頁)、「夜汽車を待つて」(六六頁)、「天外の火」(「それでも言祝がれる年はくるのか」九九頁)、「青い火」(「入り江の小さい村で」一一三頁)、「原子炉建屋」(「円筒は輝く」八三頁)、「放射能」(「禍いは青く燃える」一一八頁)、「夜の深さを 共に」(一三四頁)があげられる。さらに、「天外の火まで青く点した原発」(「風の余韻」八七頁)や「原子力の青い火」(「夜の深さを 共に」一三三頁)と記されているように、「天外の青い火」とは原子力発電所を意味する。作中ではこれらを残されたものとして批判している。『背中の地図』における原発批判に関するテーマは、別の稿で論じたい。

- (18) 金時鐘「記憶せよ、和合せよ」『図書新聞』第二四八七号、二〇〇〇年五月二七日付、一―二頁。

- (19) 同上。

- (20) 文京洙『濟州島四・三事件』岩波書店、二〇一八、一一九―一三〇頁。

- (21) このインタビューは、二〇一九年九月二九日に長崎県対馬で開催された「第三回対馬・濟州慰霊祭」に筆者が参加した際に記録したものである。

- (22) 浅見洋子、前掲『金時鐘の言葉と思想―注釈的読解の試み』二二五頁。

- (23) 金時鐘は一九五〇年四月、日本共産党に入党し、その組織下にある在日朝鮮人連盟の下で朝鮮学校の復興活動を始めとする在日朝鮮人の組織活動を行った。しかし、一九五五年に従来の組織（一九四五～一九四九年在日朝鮮人連盟、一九五一年～一九五五年在日朝鮮統一民主戦線）が共和国の指導下に置かれ、在日本朝鮮人総聯合会に改められるという方向転換がなされた。それにより、共和国の政治体制がそのまま組織に反映されることになった。文学においては、プロパガンダを文学の内容面に反映させるということだけではなく、朝鮮語での文学活動を強制する状況を作り出した。組織下における金時鐘の文学活動の概要については、『ヂンダレ・カリオン』解説・鼎談・総目次・索引「不二出版、二〇〇八年を参照。」
- (24) 金時鐘、前掲『朝鮮と日本に生きる』二八五頁。
- (25) 同上、二六五頁。
- (26) 同上、二七九～二八〇頁。
- (27) 金時鐘「窓」『現代史手帖』二〇一一年一月号、思潮社、八四～八五頁。
- (28) 金時鐘は、同『済州フォーラム二〇一九』に参加し、済州四・三研究所が

主催したセッション「四・三と境界―在日の線上から」で報告を行なった。報告内容の引用に関しては、筆者が金時鐘氏から直接見せてもらった手書き原稿を文字起こししたものである。その他の資料（韓国語）については、以下を参照した。
http://www.jejuforum.or.kr/data/publications/file2_1569302386.pdf（済州フォーラム二〇一九）三四三～三四四頁、最終アクセス日：二〇二二年六月二七日）。

(29) 金時鐘「震災を書く」『日本近代文学館』第二八八号、二〇一九年、一二頁。

（付記）本稿は、JSPS 科研費（特別研究員奨励費）20J-13971 の助成を受けたものである。

（本学大学院博士後期課程）